



【「戦後80年 語り続ける写真たち ～公文書館一帯は陸軍駐屯地だった～」】

その5 戦争の記憶をたどる

毎日、様々な人が訪れ、平和な時間が流れる豊の国情報ライブラリーですが、近隣には戦争を記憶する遺跡が残されています。戦争の痕跡をたどってみましょう。

地図内①

明治41（1908）年に陸軍歩兵第72連隊が駐屯を開始するにあたっては、陸軍墓地も設置されました。戦死者が出ることは当然のこととして、お墓の場所も用意されたのです。そして、日露戦争、シベリア出兵におけるユフタ戦、済南事変、満州事変と、戦没者碑が建立されていきました。

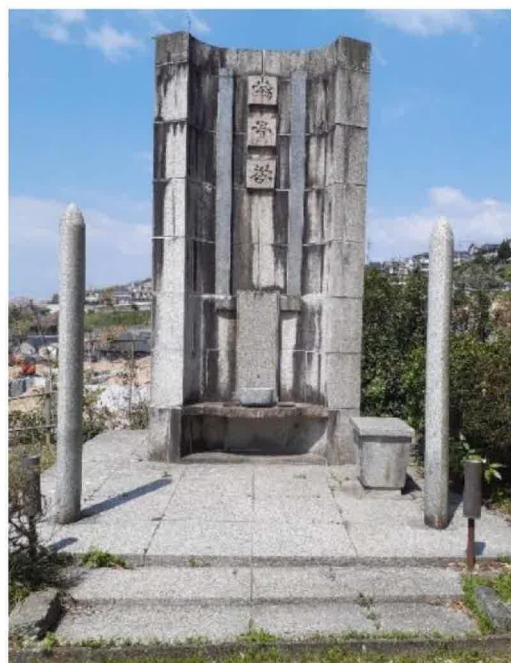
太平洋戦争が終わった後の昭和28（1953）年3月、大分県は敷地内に納骨塔を建設し、終戦当時大分連隊区司令部が保管していた分骨と戦後外地から持ち帰った無名戦士の遺骨を納骨しました。（画像①）

昭和30（1955）年3月には、この旧陸軍墓地を大蔵省から譲り受け、名称を「桜ヶ丘聖地」とし、現在は、桜の美しい公園として親しまれています。

また第一次世界大戦の捕虜として大分で過ごし、故国に帰ることなく大分で没したドイツ人兵士の墓もあり、遺族・関係者が大分を訪れるなど日独友好の印となっています。



画像①



画像②



画像③



画像④



地図内②③

陸軍駐屯地には昭和18（1943）年から終戦までは大分陸軍少年飛行兵学校が存在し、戦後は占領軍が管理していました。

やがて、全国の旧軍用地は公共施設・住宅・農地等に転用されていきます。兵舎や演習場があった場所は、昭和23（1948）年4月に大分師範学校（現大分大学教育学部）が移転してきたことを始まりとして、教育施設や住宅地になっていきました。

公園（やまばと児童公園）となった場所には「大分聯隊跡之碑」（大分聯隊跡記念碑建設委員会 昭和45（1970）年11月3日建立）（画像②）、「はるか之碑」（元大分陸軍少年飛行兵学校跡地顕彰会1995年春建立）（画像③）が建ち、のびやかに走り回る子供たちを見守っています。

地図内④

また、駐屯地と丘陵の間にある道路脇には陸軍用地を示す標石がひっそりと残っています。（画像④）

そして、変わらない姿で駐屯地の背後に見えていた丘陵では大正以降ミカン栽培が盛んでしたが、現在は宅地化が進んでいます。

残されたものの声に耳を傾け記録をたどってみると、今の私たちと同じ姿が見えることがあります。

記録を残し伝えていくことは、私たちの未来をつくることでもあると思います。

資料

- ・「縣政の窓」昭和28年6月
- ・「県有財産 国有財産 借受一件」（登録番号1995120021）

参考資料

- ・「大分県桜ヶ丘聖地（旧陸軍墓地）について」

大分県HPより

<https://www.pref.oita.jp/soshiki/12300/sakuragaokaseiti.html>

- ・「おおいたの戦争遺跡」大分県文化財保存協議会 2005年